

## 社寺参詣と「歩き」の効果

○北 徹朗（東海大学大学院生）

西野 仁（東海大学）

### 研究の動機・目的

現在、多くの日本人が旅行を楽しんでいる。『レジャー白書 2001』によると、国内観光旅行に出かけた人は1999年には5600万人、翌2000年には5990万人にのぼり、ピクニック・ハイキング・野外散歩には1999年は3300万人、翌2000年には4350万人が参加した。（自由時間デザイン協会、[2001]）

これらの活動のルーツは、江戸時代に盛んに行われていた社寺参詣に見ることができないか。当時の社寺参詣について書かれた文献の多くに『五穀豊穡・無病息災・除災招福・家内安全・商売繁盛などの御利益を求め庶民の間で盛んに行われた』と述べられている一方『御利益を求める宗教的信仰心というよりも封建制社会の中で信仰に託けて日常から脱出し道中を楽しむために行われた』と説明しているものも少なくない。

しかし、この従来の『信仰のため』『楽しみのため』以外にも『参詣地までの道中を「歩く」という行為の過程で、行為者自らが体得した効果が御利益として信じられていたのではないか』、という新たな視点から社寺参詣を捉えることができるのではないだろうか。

つまり、参詣理由は『信仰のため』『楽しみのため』であっても、参詣者が意識していたかは別として、歩くことによってもたらされる身体的精神的効果を、御利益として感じていたのではないだろうか。もしそう考えることできたならば、民衆たちが社寺参詣によって神仏から与えられたと信じていた御利益は、実は自らによって導かれていたということになる。

本研究では、江戸時代に社寺参詣が盛んだった理由の1つには、道中の歩きによって心身にもたらされる健康効果が期待されたからではないかという点に着目して、特に江戸商人の大山詣を例に文献を手がかりとした検討を試みようと考えた。

### 大山詣の歴史

【大山信仰の諸相】『大山信仰』によれば、『江戸時代に入り大山が武士から民衆信仰へと移行した時点で大山は「治病の山」として信仰された』とされている。馬や籠で参詣していた武士たちは、大山を「菩提供養」や「安産祈願」、「戦勝祈願」の山として信仰していた。近世に入り、草鞋をはいて歩行による旅をした民衆たちは大山を「治病の山」として信仰した。（圭室、[1992]）

また、大山は古来より様々な職業と階層の人々に信仰されており、信仰の内容は多岐に渡り複雑である。雨降山と名付けられているように大山信仰には「水の恵み」の祈り（豊作・大漁）の信仰。山麓の茶湯寺へ参詣し大山を死霊供養の地とする信仰。商売繁盛を願う商人・職人による信仰。15歳になると大山へ参拝し踏破できれば一人前として認められ青年会への加入も認められるという「出世の神」であるとの伝承も広い地域で行われた。（田中、[1996]）（圭室、[1992]）（西垣、[1992]）（吉岡、[1992]）

【大山を信仰した人々】大山は古代から中世にかけては將軍や武將を中心に信仰された。その後、戦国期から近世になると、農・工・商といった身分の人々も大山詣できるようになった。鈴木によれば、江戸時代における大山信仰について、『17世紀前半から幕府の支援が背景にあり、修理等が多いことを考えると、幕府の御用商人など幕府と近い関係があった階層が参詣者として浮かび

上がってくる』と、特に江戸の「上層商人」が盛んに参詣していたことが論じられている。(鈴木、[1986])

### 江戸商人と歩き

【身分と歩き】豊臣秀吉の「刀狩令」や「身分統制令」、そして江戸時代における士農工商の身分制度によって身体運動を伴う多くの娯楽が禁止された。(大石、[1977]) 1804年に民衆の武芸稽古を禁じた『武芸禁止令』<sup>1</sup>が出され、コマ回し・辻相撲・辻踊り・投扇などすることを禁じた『徳川禁令考』が度々発令された。したがって、民衆の娯楽といえは専ら見物<sup>けんぶつ</sup>であった。しかし、大山詣や富士詣<sup>ふじぎ</sup>などをはじめとする社寺参詣は、「信仰」「医療」という名目のときに限り認められた。(小田切、[2001]) (芳賀、[1996])

【歩かなかった江戸商人】江戸時代、旗本たちは今日のサラリーマンと同様に幕府関係の役所に“通勤”した。他方、商人たちはといえは店の主人は自宅が仕事場であるし、使用人たちもその多くは関西の出身で、単身赴任して住み込みで働いていた。(川崎、[1987]) つまり、彼らは職住同一の空間で生活を送り、旗本たちのように歩いて仕事場まで通う必要は無かった。

江戸時代の商家には住み込みで働く「奉公人」あるいは「丁稚」と呼ばれる封建的な身分制が確立していた。住み込み奉公人に対する主人の支配は強く、主人が奉公人の生殺与奪の権利を握り、絶対的な支配力を持っていた。したがって生活用品の調達や、商売上の雑用、配達などは当然奉公人が出かけていったと考えられる。(安藤ほか、[1960]) (宮本、[1977]) (有賀、[1973])

また、江戸における町人階級者が活躍できる範囲は江戸全体の東側、僅か20パーセントにすぎず、土地の大半が武家地であった。(川崎、[1987]) さらに、東海道・中山道・奥州街道の第1番目の各宿が、品川・板橋・千住に位置するところからみても、これらの宿を越えて出歩くことは、旅をするとき以外は考えにくい。このことから、江戸府内で民衆たちが行動できる範囲は、東側の一部の地域のみである。したがって、大山詣に出掛けた商人たちの日常生活においては歩く機会はさほど多くはなかった、むしろ少なかったのではないかと推測できる。絵図に描かれているような、商人たちの袖や裾の長い着物姿や、下駄や草履ばきといった姿からは、普段長い距離を歩く必要が無いがゆえにそういう身なりで過ごすことができたものと思われる。

ポルトガルから宣教師として来日したルイス・フロイスは、日本滞在の見聞記の中で「ほとんど歩かない日本人の姿」を書き残している。また、「歩行」が移動手段のほとんどであった江戸時代にもかかわらず貝原益軒は『養生訓』の中で、身の養生のためには「歩行すべきである」との主張を全13項目にわたって書き記している。

【『お花講』に参加した江戸商人の生活圏の歩行】大山詣に出かけた江戸商人たちは、普段どれくらいの範囲で行動していたのだろうか。居住地から花見や花火などの、いわゆる行楽として出かけた名所までの距離を、小伝馬町の商人を中心に結成された代表的な大山講の1つである『お花講』を想定し実際に歩行することで推測した。<sup>3</sup>

- ・小伝馬町～日本橋まで (市場) 片道 1560 歩 (所要時間：14 分)、約 1.1km
- ・小伝馬町～上野・寛永寺まで (花見) 片道 6253 歩 (所要時間：63 分)、約 4.4km
- ・小伝馬町～両国広小路まで (見世物・花火) 片道 1495 歩 (所要時間：13 分)、約 1.0km
- ・小伝馬町～浅草奥山まで (見世物) 片道 4882 歩 (所要時間：40 分)、約 3.4km

<sup>1</sup> 1802年、1805年、1839年、1867年にも同様の通達がされている。

<sup>2</sup> ただし、1849年に一般人の富士登山は厳禁するとの通達が出されている。その後1860年に再び許可された。

<sup>3</sup> 『山佐電子万歩計・デジウォーカー、EM-160(B)』を使用

### 代表的な大山詣のルート

江戸からの大山詣では、両国橋の袂<sup>たもと</sup>で水垢離した後、日本橋を起点として、赤坂から青山を通り、宮益坂から道玄坂、上目黒から世田谷を経て二子の渡しで多摩川を越え、二子・溝の口・多摩丘陵をあがり荏田・市ヶ尾・長津田、そして相模台地の海老名を過ぎ、相模川を渡り、厚木・伊勢原そして大山へ至るルートが江戸からの代表的なコースであった。大山登拝後は、田村の渡しで相模川を越え、藤沢・江の島・鎌倉から金沢八景にまわり、東海道を經由して保土ヶ谷を通り日本橋へ至るといふ、物見遊山も兼ねたルートを歩いた。(大山阿夫利神社、[1986])

このルートで大山へ参詣した場合、参詣者が最初に宿泊するのが荏田か長津田であり、大山御師宅でもう一泊した後、翌日大山登拝した。登拝後はまず藤沢宿にとまり、次に保土ヶ谷宿、そして翌日日本橋に到着するという、全行程4～5日間を要する旅であったとされる。(大山阿夫利神社、[1986]) ちなみに、このルートを歩行した場合の歩数・距離は、だいたい 274,630 歩・約 192.2km である。

### 大山詣による健康効果について

普段歩くことが少なかったと推測される江戸の上層商人が、夏に4～5日の大山詣をすることは、まとまった「運動」であったと解される。また、200kmに及ぼんとする全行程を歩き通すためには、それなりの歩きに慣れるための予備歩行が行われてもいたろう。この点について、1810年(文化7年)に八隅蘆庵が著した『旅行用心集』には、『旅の初日は、とりわけ静かに足を踏みしめて、草履が足によくなじんでいるかを確かめるようにするがよい。旅立ってから二、三日の間は、ときどき休んで、足を痛めないようにしなさい。はじめのうちはだれでも心がはやって、休もうとせず、がむしゃらに歩くものだ。でも足を痛めてしまえば、旅の間じゅう苦しむことになる。ともかく最初は足を大切にすることが肝心なことだ。』との記述がある。

大山詣そのものとそれに付随する「歩き」が、江戸商人たちの運動不足を解消し、身体的精神的に有益に作用したと考えることには、そう無理はないのではないか。今までの文献では、この点を直接書き記したものにはまだ巡り会えていないので、あくまで推測の域を越えることはできないが、従来の『信仰のため』『楽しみのため』という社寺参詣の解釈に、『道中の歩きの効果が心身の健康を導き、病氣治しの山として崇められたのだ』という新しい見方を加えることができるように思う。武士による信仰から民衆信仰に移行した時点で大山が「治病の山」として信仰されたという記述もこう考えれば容易に理解できよう。

これらの新しい解釈は、現段階では完全に実証されたとは言い難い。しかし、さらに関連する文献を精査し、そう言い得る手がかりを見つきたい。

参考文献・参考資料

- ・自由時間デザイン協会編『レジャー白書 2001』（自由時間デザイン協会,2001年）
- ・川崎房五郎著『江戸』（光風社出版,1987年）
- ・安藤ほか著『商業風俗』（雄山閣,1960年）
- ・芳賀登著『江戸情報文化史研究』（皓星社,1996年）
- ・大石慎三郎著『江戸時代』（中公新書,1977年）
- ・小田切毅一著 <http://www.yo.rim.or.jp/~kotagiri/edokinew.htm>（『小田切毅一のスポーツ文化資料館』）
- ・宮本又次著『江戸時代の企業者活動』（日本経済新聞社,1977年）
- ・圭室文雄編・田中、西垣、吉岡、有賀、浅香、鈴木、松岡ほか著『大山信仰』（雄山閣,1992年）
- ・松田毅一・ヨリッセン著『フロイスの日本覚書』（中公新書,1983年）
- ・貝原益軒著・伊東友信訳『養生訓』（講談社学術文庫,1982年）
- ・大山阿夫利神社編『相模大山街道』（大山阿夫利神社,[1986年]）
- ・八隅蘆庵著・桜井正信訳『現代訳 旅行用心集』（八坂書房,[2001年]）